

竹野地域プロジェクト(大型定置漁業)

(第一松正丸 17トン、松正丸 11.15トン、第二十松正丸 1.5トン、第五松正丸 3.8トン)

もうかる漁業創設支援事業検証結果報告書(改革漁船型・既存船活用型)

事業実施者:但馬漁業協同組合

実証期間:平成26年5月1日～平成29年4月30日(3年間)

1. 事業の概要

兵庫県竹野地区の漁業の主体を占める定置漁業の経営の安定的継続を図るため、改革型漁船及び改革型漁網を導入し、地域で需要の高いシロイカ(ケンサキイカ)の活イカ、タイ類、ヒラメ、カワハギ類等の活魚出荷の増加、マアジ等の活締め出荷の増加により生産金額の向上を図るとともに、修繕費等経費を大幅に削減して、収益性を改善し経営の安定を図るための実証事業を実施した。

2. 実証項目

【生産に関する事項】

改革型漁船の導入に関する事項

- A1 大型油圧機器を備え、省エネ機関を採用した改革型漁船を導入し、網上げ作業の効率化を図り、台前船を減船する。
- A5 キール式の省エネ型漁船を採用し、エンジンの大型化に伴う燃油消費量を抑制するとともに船体の修繕費を削減する。また、作業環境の改善と作業効率の向上を図る。

漁網の改良に関する事項(田久日漁場)

- B1 箱網の逆方向に底建網を設置して、底魚、シロイカ、ブリ類等を効率よく漁獲し、水揚量の向上を図る。
- B5 2段式箱網を1段式の環締方式に変更し、網替作業の回数と労働負荷の軽減を図り、漁具費を削減する。
箱網の目合いを拡大し、急潮時も操業を可能とし、操業日数の増加を図り、また、小型魚の目掛かりを防止する。

漁網の改良に関する事項(宇日漁場)

- B6 簡易環締方式に改造し、台前船を減船した操業を導入する。

資源保護に関する事項

- C1 田久日、宇日漁場とも春秋の2回1週間以上の網上げ休業を実施する。

3. 実証結果

大型油圧機器とフラットで広い作業スペースを備えた改革型漁船(17トン)を導入し、台前船を使用しない操業方法へ転換した。
省エネ機関の採用、減速航行等に努めた結果、燃油使用量を計画(20,9870、1,817千円)に対し、3年平均(17,4380、1,322千円)で3,5490、495千円削減できた。また、キール式船型の採用によりプロペラ、シャフト、舵等の故障が無くなり、船体修繕費が計画(2,491千円)に対し、3年平均(1,474千円)で1,017千円削減できた。
油圧機器導入により、台風接近時等に敏速な漁網の撤収が行え、作業の安全確保と破網が防止できた。

シロイカ、ブリ類の漁獲は、計画(8.8トン、62トン)に対し、3年平均(6.3トン、32トン)でそれぞれ2.5トン、30トン少なかった。これは、海流などの影響を受け、増減を繰り返す傾向が見られたためと考えられる。
網替え作業は計画どおり4回/年となり、環締方式により労働負荷の軽減が図れた。また、漁具費は、2年目以降に底建網の防汚加工費(2,800千円)が増額となったため、計画(6,111千円)に対し、平均(8,804千円)で2,693千円増額となった。
操業日数が計画(182日)に対し、3年平均(189日)で7日増加した。また、箱網を締めていくと、大きい目合いから小型魚が抜けるところを視認したが、数量については把握できなかった。

計画どおり、簡易環締め方式に改造し、台前船を使用しない操業方法へ転換した。

計画どおり、2漁場とも2回で延べ112日間(3年平均)の網上げ休業を実施した。

2. 実証項目

付加価値及び生産金額の向上に関する事項

- D1 断熱機能を備えた、活魚槽の積載量_をを14トンに大きくし、循環式海水冷却装置を設置することで活魚生産量を拡大する。
- D3 魚の締用に冷海水を併用し、氷の使用量を削減する。
活魚・活締に担当者を配置することで生産量を増やす。

【流通販売に関する事項】

市場価値の向上に関する事項

- E1 大型の活魚水槽を設置し、需用に見合う活イカの生産が可能となり、
- E2 販路拡大と魚価向上を図る。
活締処理することにより、魚価向上効果が見込める。

【地域活性化に関する事項】

地域との連携に関する事項

- F1 イベントに参加して、観光客、地元住民等に定置の魚をPRすることで、消費拡大を図る。

3. 実証結果

活シロイカの水揚げ量は、計画(5.3トン)に対し、3年平均(1.4トン)で3.9トン少なかった。年による漁獲変動やサイズの小型化、網の底に沈み込み活かすことができないなどが原因で、増加させることができなかった。漁獲全体の活魚率で比較すると計画(4.2%)に対し、平均(4.7%)で0.5%増加した。

漁獲1トン当たりの氷使用量は、計画(0.94トン)に対し、3年平均(1.17トン)使用量が0.23トン増加した。原因は、特に3年目に5月、6月のアジの大漁を期待し多くの氷を積込み出漁したが不漁に終わったため使用量(1.47トン/漁獲1トン)が大幅に増加したことによる。担当者1名を配置して、活魚の増産に努めた。

活イカの需要は拡大しているものの、魚体の小型化や混獲によりイカが箱網の底に沈み、傷つき活かすことができず数量の確保ができなかった。

活締することにより単価が上昇した。(アジ、ハマチ、ヒラマサ、サバ、スズキ)

	鮮魚単価		活締単価
アジ	147円/kg	→	1,035円/kg (704%)
ハマチ	179円/kg	→	813円/kg (454%)
ヒラマサ	939円/kg	→	987円/kg (105%)
サバ	373円/kg	→	1,308円/kg (351%)
スズキ	369円/kg	→	952円/kg (258%)

(3年目実績)

「カニまつり(11月)」、「北前まつり(5月)」等に積極的に参加し、PRに努めた。

4. 収入、経費、償却前利益の結果及びそれらの計画との差異・その理由

【収入】

事業3年間の水揚量及び水揚金額(平均:248トン、76,451千円)は、計画(509トン、105,777千円)を261トン、29,326千円下回った。

原因は、主要漁獲種であるアジの漁獲量が計画(389トン、49,690千円)に対し、事業1年目(124トン、22,599千円)からそれぞれ265トン、27,091千円の減少となり、これが2年目以降も続いたことによるところが大きい。

【経費】

人件費は水揚量・水揚金額がともに計画を下回ったため、初年度から減少した。また、そのほかの経費も水揚量、水揚金額が少なかったため減少したが、漁具費(平均:7,739千円)は、計画(6,111千円)を上回った。

原因は、計画では箱網の防汚加工費だけを計上していたが、底建網の汚れが思いのほかひどく、防汚加工費と運賃(2,800千円)を追加したためである。

【償却前利益】

1年目10,112千円、2年目757千円、3年目▲1,981千円と計画を下回る結果となった。

原因は、主要魚各種であるアジの水揚量、水揚金額がともに大きく減少したために、償却前利益を確保することができなかった。特に3年目(67トン、9,790千円)は、計画(389トン、49,690千円)に対し、それぞれ322トン、39,900千円減となり、償却前利益もマイナスであった。

5. 次世代船建造の見通し

計画:償却前利益	22.1百万円	×	次世代船・網漁具更新	>	船価・網漁具費	345百万円
	(改革計画5年間の平均値)		までの年数16年			
			↓			
実績:償却前利益	3百万円	×	次世代船・網漁具更新	<	船価・網漁具費	345百万円
	(事業3年間の平均値)		までの年数16年			

水揚量、水揚金額が減少したことから、当初計画した平均償却前利益の1/7となった。主な原因として、主要漁獲種であるアジの不漁によって生産額が思うように上がらず、償却前利益の確保がきわめて低調となっていることが挙げられる。

6. 特記事項

底建網を設置したことによりサワラ、底魚(ヒラメ、ブリ、マダイ等)などの漁獲量が増加し、アジによる漁獲量、金額の落ち込みを抑えることができた。

4年目以降償却前利益を確保するための取組として、経費は計画を下回っており、これ以上の削減は困難と思われるため、収入の向上が必要と考えている。地域協議会において、漁獲量の増加を期待して道網の設置位置を沖側へ変更する案も出たが、漁獲の増加や費用対効果が不確かであるため断念した。

今後は、経費削減の取組を継続し、魚価向上に重点を置くこととし、活締出荷を増やすことで収益の向上に努める。

事業実施者:但馬漁業協同組合(TEL:0796-36-1331)

(第64回中央協議会で確認された。)